母親のカガミ

「お母さん、私、この人と結婚したんだよ」
私は夫の拓也の肩に手を乗せ、姿見の前で腰を屈めた。
「これから新居に引っ越しだよ。お母さんも連れて行くからね」
私は報告してから、さて、と立ち上がる。
「荷物の運び出し、始めるか？」
「ええ。拓也は台所をよろしくね。私はこの部屋の荷物を運ぶから」
「分かった。でも、重い物を運ぶ時は無理するなよ」
「大丈夫よ、心配しなくても」
夫の優しさが嬉しくて微笑むと、拓也も笑って私を見てから、一階の台所へと階段を下りていった。
ああ、なんて幸せなんだろう。
私は拓也が行ってしまってから、もう一度姿見の前で腰を屈めた。
「ねぇ、お母さん。とても素敵な人でしょう。あの優しい笑顔に、私は惚れたのよ。お母さんは、お父さんのどういうところに惹かれたの？」
にこにこ笑いながら、私は返ってこない返事を待つ。
母が死んだのは、私が三歳の頃だった。突然の交通事故で、何の前触れもなく逝ってしまったのだ。毎日母親の愛情をたっぷり受けて育った私は、突然の別れが理解できず、しばらく母の姿を求めて家中走り回った。やがて、母がもういないのだと分かると、今度は毎日泣いて暴れては父を困らせた。
「夏紀、もう泣くんじゃない。お前のママは、いつもここにいるから。ここで、お前を見守っているんだよ」
数日後、父は私を母の部屋に連れて行き、大きな鏡の前に立たせた。母が毎日覗き込んでいた姿見だ。後で知った話だが、これは母の嫁入り道具だったらしい。姿見を見ると、顔をくしゃくしゃにした小さな私が、濡れた瞳でこちらを見返していた。
「ほら、そんな顔をママに見せたら悲しむよ。夏紀には、笑顔が似合うんだから。ママの前で、笑っておあげ」
私は涙を拭いて、鏡をじっと見つめた。化粧をして着替えを済ませた母と一緒に、私は毎朝この鏡の前に立っていた。母が鏡にぐっと顔を近づけて笑顔を作っているのを見て、私も隣で笑顔を作っていた。それを思い出したら、今も鏡の中に笑顔の母が映っているよ

うな気がして、私はいつの間にか楽しそうに笑っていた。
「ママ、ここにいるんだねぇ」
「そう。ママはこれからも夏紀と一緒だよ」
私が小学生になると、母の部屋がそのまま私の部屋になった。姿見もそのままだ。
「お母さん、行ってきます」
私は毎朝、姿見に挨拶してから家を出た。帰宅すればもちろん、ただいま、と挨拶をした。夕食を食べながら父と学校の話をすれば、部屋に帰ってからは姿見に向かって同じ話を聞かせた。そんな私の習慣は、中学生になっても、高校生になっても、専門学校に通うようになっても続いた。
辛いことがあった日には、姿見に語りかけながら何時間も泣いた。当然、姿見は何も言ってはくれない。しかし、ここに母がいる、泣いている自分を優しく見守ってくれている、と信じる気持ちは、傷ついた私への何よりものエールになった。
私とたった三年過ごしただけで天国に逝ってしまった母は、その後もずっと、鏡の中で私を支えてくれたのだ。
働き始めるようになってまもなく、私は拓也に出会った。拓也のことも、私はすぐに鏡の中の母に報告した。拓也は姿見に語りかけるという、端から見れば奇妙な私の習慣を、温かい笑顔で受け入れてくれた。
「俺なんて、もう何年もお袋と五分以上会話した記憶がないよ。お袋は俺と話したがっているんだけど、俺がさっさと切り上げてしまうんだ。干渉されるのが嫌でさ。だけど、夏紀は毎日こうやって、お母さんと喋っているんだな。夏紀のお母さん、きっと嬉しいだろうな」
そのうち、私が拓也の実家を訪れる機会がやってきた。私は姿見の母に語りかけるように、拓也の母親とも何時間も話をした。もちろん、拓也も交えてだ。拓也の母親は、息子とこんなに話したのは久し振りだ、あなたのお陰だ、と私の訪問を本当に喜んでくれた。私も、話ができてとても嬉しかった。
私に、もう一人の母親ができた瞬間だ。
拓也との結婚話が持ち上がると、それが現実になるまでにさほど時間は必要なかった。
さすがに式場に姿見を持ち込むことはできなかったが、幸せな結婚式の話は、何時間も姿見の中の母に語って聞かせた。
――そして、今。
私は拓也と生活する新居に引っ越すため、荷物の運び出しをしていた。もちろん、姿見

も持って行く。今度は何処に置こうか。私の部屋でもいい。拓也と一緒の寝室でもいい。気が早いけれど、子供部屋に置いて、生まれてくる孫の姿を見守ってもらってもいい。私の顔は自然とほころんでいた。

「夏紀ー！　引っ越し屋さんが、まずは大きい物から持ってきてくれって。一人で大丈夫かー？」

拓也が階段下で声を張り上げた。

「大丈夫ー！」

私は答えるとすぐに、姿見の側に行った。そんなに重いものではない。階段を下りる時さえ気をつければ、きっと平気だ。私は何処に置こうかと楽しみに考えながら、姿見を持ち上げた。

ふらっと眩暈がしたのは、その時だ。

あっ、と思った瞬間には、私はうつ伏せに倒れていた。手は姿見から離れていた。鏡と床がぶつかる、派手な音がした。

「夏紀！」

音を聞きつけて、すぐに拓也が駆けつける。幸い、拓也に抱き起こされた私に怪我はなかった。

――でも。

床に打ち付けられた姿見には、大きな罅がいくつも走っていた。鋭い破片も散らばっている。私と拓也はしばらく言葉を失って、その惨状を見つめていた。

母親の鏡。

これからの新しい生活を、今までみたいに見守ってもらおうと思っていたのに。

「ごめん、夏紀。やっぱり俺が運んでやればよかった」

申し訳なさそうに、悔しそうに、拓也が瞳を伏せた。

「どうして拓也が謝るのよ。あなたは何にも悪くないじゃないの」

私は割れた鏡を見つめる。もう、母は見守ってくれない。それは、悲しいことだった。拓也を責めたくなるくらい、悲しいことだった。それなのに、私の心の中には悲しみとは別の感情が広がり始めている。それは何処かすっきりとした、すがすがしい気持ちだ。

私はいつの間にか、自分の腹部にそっと手を触れていた。ここに新しい命が宿っていると知ったのは、つい最近のことである。

「妊娠してから貧血気味だって分かっていたのに、無理をした私がいけないのよ。…それに、これで良かったのよ」

そう言った私は、いつの間にか微笑んでいた。
「今度は私がお母さんになるんだもん。親離れしなさい、ってことなのよ」
鏡の破片に映った私は、幼い私を見守っていた母とよく似た、とても優しい表情をしていた。